

⑧ 高原農業研究所（80年間の主な業績）

昭和23年

保温折衷苗代の技術体系が確立され、阿蘇地帯で20日程度田植が早くなることから増収効果があり、高く評価された。当育苗法による栽培面積は昭和30年度に5,000haに達した。

昭和42年

波野村（現阿蘇市）、高森町では昭和31年以来、春播キャベツが普及定着し、昭和41年には国の指定産地となった。現場では初夏播キャベツの要望が強くなり、栽培基準を策定した。



阿蘇を代表する高冷地露地野菜のキャベツ

昭和46年

昭和40年代初期から普及を始めた水稲機械移植栽培について、高冷地における移植適期、品種、施肥法等の基準を策定し、省力安定技術として生産現場に定着した。

昭和47年

熊本県と農林省九州農業試験場の共同育種事業により水稲「あそみのり」を育成した。栽培適性に優れ、収量が確保されやすいため、熊本県ほか5県で奨励品種に採用された。

昭和50年

阿蘇谷大規模基盤整備事業により強酸性土壌が出現し、水稲の生育障害が発生した。このため、関係機関とともに、特殊土壌の改善とそれに基づく水稲栽培指針の策定を行った。

昭和51年

昭和45年の稲作転換を機に、高収益性の夏秋トマトが導入され、雨よけ施設化による増収効果、品質向上、病害抑制、追肥量の節減等を実証し、普及拡大に寄与した。



高冷地域で産地化が図られてきた夏秋トマト

昭和56年

昭和13年から雑穀育種の指定試験地として、大豆の品種育成を行っていたが、その中から採用された「フクユタカ」は、現在でも西日本の主要作付品種となっている。



西日本の主要大豆品種「フクユタカ」

昭和 58 年

阿蘇地域で栽培される陸稲は、倒伏や晩熟により、作柄が安定しなかったため、栽培適性と収量、品質に優れた「ミサトハタモチ」を選定し、陸稲の生産安定を図った。

昭和 63 年

昭和 54 年に阿蘇山の活動が再び活発化したのを機に、試験に取り組み、雨よけ栽培技術を確認した。これにより、野菜の生産が安定し、新品目の導入も可能になった。

また、全国的な良質米志向と市場動向を踏まえ、高冷地域においては「コシヒカリ」、「ミネアサヒ」等の銘柄米品種が作付され、生産安定のための生育診断技術を確認した。



「コシヒカリ」の倒伏軽減のための現地試験

平成 6 年

夏秋ホウレンソウは、市場の需要と収益性が高く、高原地域における野菜栽培の中で大きな位置を占めていることから、この作期における有望品種を選定した。

また、阿蘇の高原には、数多くの野の花が自生しており、これら野の花の特産花きとしての商品化を目的に、切り花で利用可能な品目の検索を行った。

平成 8 年

平成 2 年の大雨に伴い、多量の火山灰がほ場に流入堆積したことを受けて、種々の復旧工法に対する水稲への影響を経年的に検討し、被災地域の水稲生産に有用な情報を提供した。



平成 2 年 7 月の水害では場に流入した火山灰土

平成 10 年

夏秋トマトは高冷地域の主要作目であるが、より省力的な幼苗接ぎ木法について病害抵抗性を有する台木の選定と、活着率向上のための耕種条件の情報提供を行った。

平成 20 年

管内では地域特産としてソバが約 300ha で作付されているが、気象災害の回避と夏場の新ソバの提供を目的に、夏ソバ品種「なつみ」を選定し、普及拡大を図っている。



生産現場に導入が図られた夏ソバ品種「なつみ」